

研究ノート

状態事象と現在完了形について¹⁾

傅 建 良
(関西学院大学大学院)

1. はじめに

Leech (1994) によると英語の現在完了形には四つの用法があり、この中の一つは“state-up-to-the-present”用法であり、(1 a, b, c) のような用例が取り上げられている。

- (1) a. We've lived in London since last September (i.e. “London is where we are living now.”).
 b. Have you known the Faulkners for long?
 c. That house has been empty for ages.

(Leech 1994 : 36、下線は筆者、以下同)

上記の三つの例文とも状態動詞・事象 (live, know, be empty) の現在完了形²⁾ によって「継続」の意味を表している。一方、同じ状態事象でも現在完了形をとるケースと取らないケースがあると Klein (1992) が指摘している。下記の (2a) はごく自然な例であるが、(2b) は容認されない。

- (2) a. The door has been open.
 b. *The door has been wooden.³⁾ (Klein 1992 : 540-541)

さらに、Declerck (2006) によると be の現在完了形が次の (3a, b, c) という三つの意味を表現することができる。

- (3) a. [How much longer will I have to wait?] I have been here since five a.m. (continuative reading⁴⁾)
 b. [Oh, there you are!] Where have you been all this time? (up-to-now reading)
 c. Have you ever been in Singapore at New Year? (indefinite reading)
 (Declerck 2006 : 230)

Smith (1997) によると、文 (clause) のアスペクト意味は事象 (situation) の内在的アスペクト意味と視点 (viewpoint) との相互作用によって構成されると考えられる。この考えに基づいて、以上のように Leech (1994)、Klein (1992)、Declerck (2006) 等の先行研究に見られた不統一な箇所を踏まえたうえで、本稿では次の三つの問題を解決しようと試みる： a) 状態事象の各種の内在アスペクト性を分析するモデルはあるのか (2 節)； b) 状態事象は現在完了形という視点 (viewpoint) をとる際の制限は何か (4 節)； c)

状態事象の現在完了の意味解釈（文のアスペクト意味）とa)のモデル（あるとすれば）とはどのような関連があるのか（4節）。

2. 状態事象

状態事象は事象の一種として多くの先行研究に取り上げられているが（Vendler 1967、Quirk *et al.* 1985、Smith 1997等）、状態事象と言っても一律に完全に同じ内在アスペクト性を持つわけではない。状態事象の持つ各種の内在アスペクト性をさらに細かく分析する先行研究は比較的少なく、特にアスペクトの視点（viewpoint）から状態事象が現在完了形をとれるかどうかを判断する基準については、今までほとんど扱われていない。

2.1 Vendler (1967)

(4)はVendler (1967)の有名な動詞分類であり、(4d)は本稿の研究対象でもある状態動詞（事象）である。Vendlerはlove, have, possess, like, dislike, know等のような典型的状態動詞（事象）を取り上げると共に、「習慣」(habits)も状態事象として扱っている。Vendler (1967:106)によると“Habits (in a broader sense including occupations, dispositions, abilities, and so forth) are also states in our sense.”この考えはSmith (1997)とほぼ同じである。

(4) a. activities ; b. accomplishments ; c. achievements ; d. states

さらにVendler (1967)は「習慣」(habits)を表す状態事象には“specific states”と“generic states”という種類があると主張し、両者の区別を次のように説明している。

(5) A cabdriver might say that he was driving his cab all morning, but the king of Cambodia can hardly say that he was ruling Cambodia all morning. The obvious explanation is that while driving a cab is a fairly uniform thing, as are also smoking, painting, and writing, the actions which a ruler as such is supposed to perform are manifold and quite disparate in nature.

(Vendler 1967: 108-109)

2.2 大橋 (2007)

状態事象を本格的に再分類する研究には大橋 (2007)がある。大橋 (2007)は認知の視点から時間軸上の事象の「変化」に焦点を置いて状態事象⁵⁾を(6a, b, c)のように三種類に分けている。

(6) a. John is in the office.
b. John knows the answer.
c. John is intelligent.

(大橋2007 : 79)

Fig 1では矢印の線は“time line”を、白抜きの部分は認知対象を、「○」は「変化」を示している。(6a)は一時的な状態を表し、「開始点」と「終了点」が認知され、(6b)は「開始点」(get to know)のみが認知され、(6c)は「開始点」も「終了点」も持たない恒常

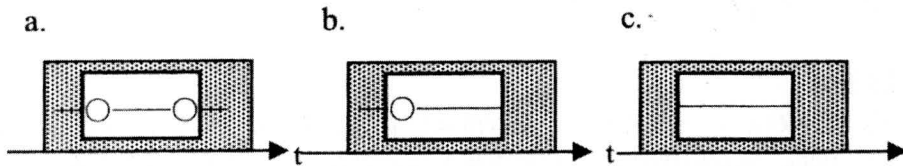


Fig1. (6a, b, c) の事態の種類 (大橋2007 : 79)

性を持つ状態事象である。

従来の先行研究で状態事象に分類されたものが、Fig 1のように異なったアスペクト性を持つことを指摘している点が、上述の先行研究 Vendler (1967) と大橋 (2007) のオリジナルな視点である。しかしながら、それらのアスペクトの差異は指摘されているが、状態事象の現在完了形の統語的・意味的な影響については殆ど言及されていない。

2.3 本研究の立場

本研究では内在アスペクト意味によって状態動詞をさらに分析するためのモデルを提案する。この提案によって、現在完了形を取るものの可否及び意味解釈を基準とし、上記の例 (1) - (3) から見られる矛盾している現象を統一的に説明できる。その前にまずアスペクト多義性問題を説明しておく。

2.3.1 アスペクト多義性

Smith (1997:18) ではアスペクト多義性を “situation type shift” と呼ばれ、“basic level” と “deprived level” 二種類があるとされている。例えば、(7a) の know は stative であり、(7b) の know は副詞 suddenly によって achievement に転移している。cough と play にも似た転移現象がみられる。アスペクト多義性は個別的な現象ではなくほとんどの事象に現れていると言えるだろう。

- | | |
|---|-------------------------------|
| (7) a. Bill <u>knew</u> the truth. | (stative) |
| b. Suddenly Bill <u>knew</u> the truth. | (achievement) |
| a' Mary <u>coughed</u> . | (semelfactive ⁶⁾) |
| b' Mary <u>coughed</u> for an hour. | (activity) |
| a'' Kim <u>played</u> a set of tennis on Friday. | (accomplishment) |
| b'' Kim always <u>played</u> a set of tennis on Friday. | (habitual stative) |
| | (Smith 1997 : 18) |

2.3.2 モデル (situation type)

状態事象のアスペクト性を究明するために、時間軸上に「前段階」と「本段階」と「後段階」を設定する。「前段階」には「あり」と「なし」と二つの可能性があり、「後段階」にも「あり」と「なし」が考えられる。論理的にこの三つの要素の組み合わせ (モデル) が4種類あると考えられ、本稿ではそれぞれA型、B型、C型、D型と命名する。

(8) 四つのモデル

	前段階	本段階	後段階
A型	[-state]	[state]	[-state]
B型	[-state]	[state]	[state]
C型	[state]	[state]	[-state]
D型	[state]	[state]	[state]

2.3.2.1 A型 : [-state] [state] [-state]

A型は「前段階」と「後段階」を両方持つ状態事象である。下記のFig 2がA型のアスペクト性を表している。Fig 2では [-state] は「本段階」と異なった事象を、B1とB2⁷⁾ は二つの事象の境界線を、「○」は「変化」を示している。時間軸上で、まず [-state] (前段階) からある「変化」が生じ、「本段階」となり、さらに「本段階」からある「変化」が生じてから、[-state] (後段階) となるという流れが考えられる。

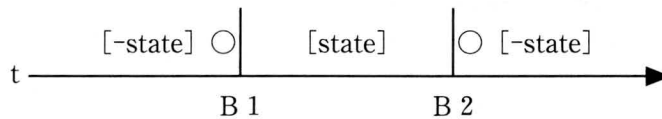


Fig 2 A型モデル

A型の例 (9a) について分析してみよう。「本段階」である <he be in the office> には「前段階」である <he be not in the office> 及び「後段階」である <he be not in the office> がある。Fig 2にある左側の「○」が「入室する」ことを表わし、右側の「○」が「退室する」ことを表す。「入室」と「退室」を意味する「○」が「本段階」に含まれていないことが本稿と大橋 (2007) の異なったところである。(10a, b) もA型の例であり、同じように内在アスペクト性を分析できる。

(9) a. He is in the office.

b. [-state] : <he be not in the office>

[state] : <he be in the office>

[-state] : <he be not in the office>

(10) a. We follow him back into the bathroom. The shower is on but he notices the window. It's open. (MSC⁸⁾)

b. When I'm here, ladies and gentlemen, I expect to be treated decently...

(同上)

2.3.2.2 B型 : [-state] [state] [state]

B型の事象は「前段階」は持っているが、「後段階」は持っていない。それゆえ、時間軸上で「前段階」からある「変化」が起き「本段階」となり、そのあとはずっと「本段階」のままになっている。

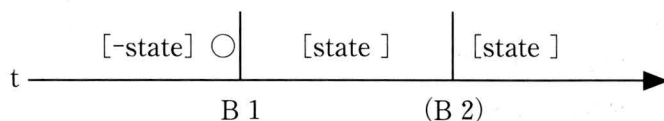


Fig 3 B型モデル

B型の用例(11a)では、<he know Mary>には「前段階」である<he not know Mary>は可能であるが、「後段階」である<he know Mary>は一般的には考えられない。一旦「知る」とずっと「知っている」というのが普通である。しかしながら特別な文脈さえ作ればこの状態事象がA型に属する可能性も十分考えられる⁹⁾。このような多義性用例は<be dead>にも見られる。(12a)は典型的なB型であるが、(13a)はA型である。

(11) a. He knows Mary.

b. [-state] : <he not know Mary>

[state] : <he know Mary>

[state] : <なし>

(12) a. He is dead.

b. [-state] [state] [state] (B型)

(13) a. My legs are dead. 足がしびれた。足が感じなくなった。

(ユース)

b. [-state] [state] [-state] (A型)

2.3.2.3 C型 [state] [state] [-state]

C型は「前段階」を持たず「後段階」を持つアスペクト性の事象である。次の(14a, b)、(15a)はすべてC型のアスペクト性を持つ状態事象の例である。時間軸上の三段階の視点から見ると、(15a)の状態事象(<my son be alive>)は「前段階」(<my son be not alive>)を持たず、「後段階」(<my son be not alive>)を持っていることがわかる。しかしながら、永遠に生きている「神」の世界では、(15c)のような状態事象(<Goddess be alive>)が「前段階」も「後段階」も持たない後述のD型になるのだろう。同じ<be alive>でもこのような多義性が見られる。

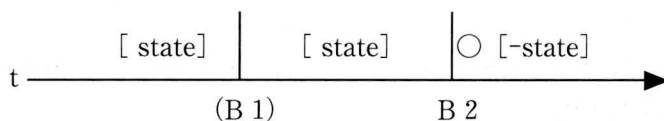


Fig 4. C型モデル

(14) a. A colored woman appears as the door opens. She is young and obviously educated. (MSC)

b. Bob's neighbor Phil runs down the driveway with a wrench in his hand. Phil is short and heavy, wearing a golf shirt. (同上)

- (15) a. My son is alive, said Annunziata, her dark eyes gleaming in the candlelight. (BNC)
- b. [-state] : <なし>
 [state] : <my son be alive>
 [-state] : <my son be not alive>
- c. cf. The Goddess is alive and powerful and sentient, (BNC)

2.3.2.4 D型 [state] [state] [state]

D型は「前段階」も「後段階」も持たないアスペクト性つまり恒常性を持つ事象のことである。

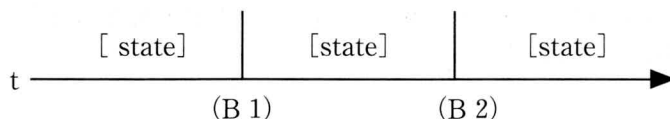


Fig 5. D型モデル

ドアの素材を表す (16a) の事象 (<the door be wooden>) は我々の生きている世界では恒常的であり、<the door be not wooden>という「前段階」あるいは「後段階」を持つことはあり得ない。(17a) の事象 (<the loom be wooden>) も (16a) と同様で恒常的であるが、(17b) の事象 (<her expression be wooden>) は「彼女は表情が堅い」という意味なので、明らかにD型ではなくA型となるわけである。

- (16) a. The door is wooden.
 b. [-state] : <なし>
 [state] : <the door be wooden>
 [-state] : <なし>
- (17) a. On the other side of the room is a large, free-standing loom, which resembles a grand piano. The loom is wooden; a tapestry is half-completed. (MSC)
- b. Betty is sitting in her chair in a corner and Mitchell is standing over her, his hand on the back of the chair. Her expression is wooden. (同上)

3. 仮説

本稿では、便宜上Declerck (2006:217) の用語 “before now” と “co-extensive” を使い現在完了形の各用法を説明する。Declerck (2006) の “before now” は従来の先行研究で言われている「完了・結果・経験」に相当するものであり、“co-extensive” は「継続」用法に相当するものである。Declerck (2006) のこれらの言い方を用い (18) のような仮説をたてる。

- (18) a. [-state] の有無を基準とし状態事象の内在アスペクト性を分析できる。
 b. 「前段階」と「後段階」を両方持つ状態事象 (A型) は、現在完了形をとることができ、“before now” と “co-extensive” の両用法が可能である。一方、「前段

階」と「後段階」を両方とも持たない状態事象（D型）は、現在完了形を取らない。

- c. 「前段階」のみ持つ事象（B型）は“co-extensive”用法のみが可能である。
 d. 「後段階」のみ持つ事象（C型）は“before now”用法のみが可能である。

4. 検証 (Situation Type + Viewpoint)

4.1 A型 : [-state] [state] [-state]

(19) の事象 (<Mr Whorf be our sales representative>) は「前段階」と「後段階」(<Mr Whorf be not our sales representative>) を持っているA型なので「開始点」と「終了点」が考えられる。「開始」の存在によって(19a)の“co-extensive”意味が可能となり、また「終了」の存在によって(19b)の“before now”の意味も可能になる¹⁰⁾。(20)と(21)の例についても同様に説明ができる。

- (19) a. Mr Whorf has been our sales representative for 21 years. (co-extensive)
 b. Mr Whorf has been our sales representative. (before now)
 (Declerck 2006 : 228)

- (20) When a man. . . , has done many kinds of work - has been a cobbler, has been a carpenter, has been an engineer, has been a painter and a musician - naturally he is very rich. . . , and each work that he has done has opened a new door into his being. Slowly slowly, many doors of his being are opening; his consciousness expands, he becomes huge, enormous. (before now)
 (Osho, Bhagwan Shree Rajneesh, *The Book of Wisdom* (p. 391), Google Book)

- (21) a. How much longer will I have to wait? I have been here since five a. m. (co-extensive)
 b. Oh, there you are! Where have you been all this time? (co-extensive)
 c. Have you ever been in Singapore at New Year? (before now)
 (例文 (3) の再提示)

4.2 B型 : [-state] [state] [state]

(22) はB型アスペクト性を持つ状態事象 (<I be taller than my mother>) の現在完了形の例である。Declerck (2006) によると(22)の意味は“co-extensive”のみである。その理由としては“once you are taller than your mother you remain taller than her at least in the world as we know of”が取り上げられている。Depraetere (1998 : 603) も“irreversible”という用語を用いDeclerckと似たような考えを示している。

- (22) I have been taller than my mother since I was twelve. (co-extensive)
 (Declerck 2006 : 227)

- (23) Have you known my sister for long? (co-extensive)
 (Quirk *et al.* 1985: 192)

確かにDeclerck (2006)とDepraetere(1998)の考えによって(22)、(23)は“co-extensive”意味のみ可能であることも簡単に説明できるが、(24)～(27)のいわゆる多義性に関する例を十分に説明することはできない。本稿で提案した四つのモデルに基づき説明すれば、(24)～(27)の例をすべてうまく説明がつくだろう。

(22) の<I be taller than my mother>と(23)の<you know my sister>はB型アスペクト性を持つ状態事象であり、「開始」しか持っていないので現在完了形が“co-extensive”のみ可能である。(24)の<I know him>は一見B型のように見えるが、“but that has nothing to do with now”という文脈によって人為的に<I not know him>という「後段階」を作られたので、(24)はA型と変化し“before now”の意味も表現できるようになった。(25)は詩の表現であり、繊細な気持ちを巧みに表現するニュアンスもあるだろうが、アスペクトの立場から見ると、(24)と同じように「後段階」を作られたことによってA型に転移し“before now”の意味になったわけである。

(24) “Yes, I have known him before; but that has nothing to do with now.”
(before now)
(Annie Thomas, *False Colours* (p.248), Google Book)

(25) The more we talk,
The more I believe
I have known him before. (before now)
(Diane Lynne, *Poetry of Emotions* (p.11), Google Book)

<be dead>の用例について2節で提案した四つのモデルによって解析してみよう。B型は“co-extensive”のみ許すので、(26a)は“before now”の解釈が優先されてしまい¹¹⁾容認されない。しかしながら“co-extensive”の証拠である副詞句(for seven days)の出現によって(26b)は“co-extensive”の解釈となり容認されるようになる。

(26) a. *Chris has been dead.
b. Chris has been dead for seven days. (co-extensive)
(Klein 1992 : 541)

<be dead>のもう一例を見てみよう。(27)の“have been dead (once)”はもちろん“before now”用法であり、一見4.2の仮説に違反しているが、実際に(27)の<be dead>が(26)の<be dead>とは明らかに異なる。(27)の<be dead>は、「死んだよう」な状態のことで、言うまでもなく「死んだようでない」という「前段階」と「後段階」を持つことができる。「後段階」の力によって“before now”用法が可能となっている。

(27) How many of you here have been dead and got another shot at life. I got mine St. Patrick's Day 1974. I was killed and left for dead after a car accident. (中略)
But I KNOW that when this life is over, there is another one. So, (I) have been dead once already and been given another chance. (before now)
(2008年6月19日21:41 <http://www.mylot.com/w/discussions/1250824.aspx>)

4.3 C型 [state] [state] [-state]

C型事象は前段階を持たず「後段階」を持つアスペクト性であるので、「後段階」のみ持つ事象は“before now”用法のみが可能である。(28)の<she be young>と(29)の<every old man be young>は、“co-extensive”意味に必要な「前段階」を持たないので“before now”解釈のみ可能である。

(28) “Yet,” I reflected, “she has been young once; her youth would be contemporary with her master’s; Mrs. Fairfax told me once, she had lived here many years. . .”
(before now)

(Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (p.165), Google Book)

(29) Though every old man has been young, and every young one hopes to be old, there seems to be a most unnatural misunderstanding between those two stages of life.
(before now)

(Tryon Edwards, *A Dictionary of Thoughts* (p.385), Google Book)

4.4 D型 [state] [state] [state]

(30)の事象(<the door be wooden>)は「前段階」も「後段階」も持たない状態事象であり、現在完了形をとるのが不自然である。しかしながら、「前段階」もしくは「後段階」を持たせるような文脈さえ作れば、他のモデルに変化することによって現在完了形を取るようになる。(31)の事象である<British versions be wooden>はもともと(30)のようにD型であるが、“this one rings - it is bronze, properly Roman bronze”という文脈からも分かるように、「後段階」である<British versions be not wooden> (<British versions be bronze>)が現れてA型となったので、“before now”と解釈されることにもなれる。(32)も同様に解釈できる。

(30) *The door has been wooden.
(Klein 1992: 540)

(31) Previous British versions have been wooden; this one rings - it is bronze, properly Roman bronze.
(before now)

(Osip Mandelshtam *et al.*, *Selected Poems* (p.XVII), Google Book)

(32) Where a railway line cut through a farm lot, the corporation was obliged to install a private farm crossing joining the two pieces. If the topography called for a bridge, it put up a beam bridge or simple trusswork of braced, diagonal timbers. Almost all such structures have been wooden, and their numbers have gradually diminished as severed parcels have been attached to other farms on the same side. More have disappeared as the tracks that they spanned have been abandoned, and we may expect to see earth filled back into cuttings across disused roadbeds.
(before now)

(Thomas F. McIlwraith, *Looking for Old Ontario* (p.273-274), Google Book)

5. まとめ

本稿では、状態事象 [state] と異なった [-state] の有無を基準とすれば、状態事象の各種の内在アスペクト性を分析できることを検証した。

「前段階」は「開始」に、「後段階」は「終了」に焦点を置く時間構造である。状態動詞の“co-extensive”用法はある状態が「開始」から t_0 までずっと保っているの、「前段階」が欠かせないのである。同様に状態事象の“before now”用法はある状態が「終了」した時点から t_0 までずっと t_0 との関連を保持しているの、「後段階」が不可欠である。

モデル毎に説明すると次のようになる。「前段階」と「後段階」を両方持つ状態事象（A型）は現在完了形をとることができ、“before now”と“co-extensive”両用法は可能である。一方、「前段階」と「後段階」を両方とも持たない状態事象（D型）は現在完了形を取らない。また「後段階」のみ持つ事象（C型）は“before now”用法のみが可能であり、「前段階」のみ持つ事象（B型）は“co-extensive”用法のみが可能になる。

アスペクト多義性現象は実際に「前段階」と「後段階」の出現・消失によって生じたものと考えられる。

(E-mail: albertfuu@hotmail.com)

注

- 1) 本稿は英語語法文法学会第16回大会のワークショップでの発表（2008年10月18日）に加筆したものである。
- 2) 本稿では、便宜上「状態事象を表す動詞（be動詞も含む）の現在完了形」を「状態事象の現在完了形」と呼ぶことにする。
- 3) *は容認されない文を示す。
- 4) Declerck (2006) によると“continuative reading”は t_0 を含む継続用法であり、“up-to-now reading”は t_0 を含まない継続用法である。なお、 t_0 は“temporal zero-point”の略で、“the time from which all the temporal relations expressed by a tense ultimately take their starting point”と定義され (Declerck 2006: 97)、一般的には“speech time”とも呼ばれる。
- 5) 大橋 (2007) は“situation type”を「事態」と訳している。
- 6) semelfactive (一回相, e.g. knock, cough) は[-static], [-durative], [-telic]のアスペクト性を持つ事象である (Smith 1997: 30)。
- 7) B1とB2について、Fu (2007) を参照。
- 8) MSCは自家製の映画台詞のコーパスである (574本映画、約1400万語)。全てのデータは<http://www.script-o-rama.com/table.shtml>からダウンロードしたものである。
- 9) 記憶喪失症等によって、「後段階」があることも考えられる。その場合のknowは異なった内在アスペクト性を持つし、現在完了形をとった文の意味解釈も異なる。4.2節のknowの多義性用法をご参照。
- 10) (19a) の副詞句“for 21 years”の役割については詳しく展開しない。
- 11) Declerck (2006: 227-228) によると、①副詞もしくは②進行形もしくは③語用論要素のような「証拠」がある場合のみ現在完了の節 (clause) はcontinuative (“co-extensive”の一種) と解釈される。(26a) にはこのような証拠は一切見当たらない。

参考文献

- Declerck, R. (2006) *The grammar of the English tense system: A comprehensive analysis*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Depraetere, I. (1998) On the resultative character of present perfect sentences. *Journal of Pragmatics*, 29(5), 597-613.
- Klein, W. (1992). The present perfect puzzle. *Language* 68(3), 525-552.
- Klein, W. (1994). *Time in language*. London: Routledge.
- Leech, G. N. (1994) *Meaning and the English verb*. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing Ltd.

大橋一人 (2007) 「事態の焦点化と時間認知構造」『英語と文法と——鈴木英一教授還暦記念論文集』76-88, 東京: 開拓社.

Quirk, R. *et al.* (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.

Smith, C. S. (1997) *The parameter of aspect (2nd)*. Dordrecht: Kluwer Academic Publisher.

Vendler, Z. (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

辞書と用例出典

BNC

Google Book (<http://books.google.co.jp/>)

<http://www.mylot.com/w/discussions/1250824.aspx> (2008年6月19日21時41分)

MSC (Movie Script Corpus) : <http://www.script-o-rama.com/table.shtml>

ユースプログレッシブ英和辞典 (小学館)